

# T1a、T1b の腎がん患者に対する 腹腔鏡下手術の実施率



## 測定対象

《分子》 分母のうち、腹腔鏡下手術を施行した患者

《分母》 当腎悪性腫瘍（初発）の T1aT1b で腎（尿管）悪性腫瘍手術を施行した退院患者数

## 解説

臨床病期 T1 および T2 の腎がんに対して、腹腔鏡下根治的腎摘出術は、近年の標準術式のひとつになっています。従来の開腹術と比較した場合、手術成績（手術時間・出血量・合併症の頻度と種類）は変わらず、術後経過（食事/歩行開始までの期間・入院期間・鎮静剤の使用量）は腹腔鏡手術の方が良好となっています。ただし、腹腔鏡下手術には、開腹手術とは異なる手術技術の習得と局所解剖の理解が不可欠であり、学会による厳しい審査で技術を認定された医師が、質の高い腹腔鏡手術を提供しています。

## 結果

2019 年度                      84%

2018 年度                      91%

## 分析

初期腎がんに対する腹腔鏡下手術の割合は増加しています。近年、当院では泌尿器内視鏡学会の腹腔鏡認定医が増えており、実施率が増えている一因であると考えます。